

# 2020年の夏に思う事

ながれ

末次 聡子 (すえつぐ さとこ / 京都市在住)

今年の夏はこれまでとは違う夏になりそうだ。帰省先の宮崎県は新型コロナ感染者急増のため県内出身者の不要不急の帰省を自粛することを求める(7月27日現在)。もう一つの帰省先福岡県では過去最高の感染者。現実を無視してはいられない。何を優先すべきか、一人一人が責任をもって考え行動することが求められる。

3月末から休校措置が始まり、小学生2人と保育園児1人、遅れて5月からテレワークの主人と5人で70平米の決して広いとは言えない集合住宅で密な自粛生活を送った。突然休校措置となった小学生にすぐに与えられるドリルも手元になく、分別のつかない保育園児はエネルギーをもてあまし、元気な彼らにとっては過酷な(いや最高!)状況で、YouTubeとゲームと散歩と少々の公園遊びで最初の一カ月をなんとかやり過ごした。その間はまるで落とし穴に落ちたような気分だった。中学受験を控えるママ友は3人の子ども達に1人1台の端末を与え、塾を通しZoom学習させていた。自分を新たな環境に適応させられるかどうかはその人の存在価値を決定づける、そんな社会的風潮が蔓延しているようで息苦しささえ感じるほどだった。

「コロナ禍が人と人を分断させる」とある知識人が話していた。それとは逆に、我が家の場合、普段不在の父親が家にいる事になり、逆に家族団らんの時間が増えた。仕事の忙しさにかまけてゆっくり見る事のできなかつた子供たちの様子をじっくり見る事が出来た。これまで学校任せになっていたことを反省し、新たな目標や考え方を発見することができた。ミニマムな単位の間人間関係は本来の形に戻った。同時に

パンデミック時には、その大きさの単位で社会を回すことがベストの対処であることが分かった。人の移動が制約されたことで見えてきた、生み出されたことがきっと他にもたくさんあるのではないかと思っている。

当たり前とっていたことを、改めて考え直してみる、見つめなおしてみる。コロナ禍は、そんな時間なのだと言いつけさせる。「この危機の時代、哲学への要請が強まっている」と新聞(7月20日日経新聞)にあった。コロナウィズ・アフターを知識人や論客が活発に紙面やテレビ上で議論しているがどれも空虚感が漂う。きっと、誰にも分からない。ただ、一つだけ言えることは、私たちは何か危機的な状況に対して備えが必要だということ。それは、一つとは限らないし、物質的なものだけではなく、精神的な実態のないものかもしれない。

最近、子ども達に交じって書道教室に通い始めた。大人は「いろは」と一緒にそれぞれのひらがなの由来となる漢字を横に書きながら学習する。先生曰く、「ひらがなの形の本質を知るにはもとの漢字を知ることが必要」とのこと。同時にひらがな自体は漢字を崩してそれを再構築して形作られたものであることが分かる。今の私たちには、我々が目標としているものは何かを改めて考え、当たり前とあったことをいったんバラバラにし分解し、再構築していくことが求められているのではないかと思う。同時にそれらは、西洋文化の賞賛や借り物にとどまらず、日本社会独自のものであってほしいと願う。社会がもっと強くならなければならない。そんなメッセージを、私は強く感じている。